



MARCH 31, 2020

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University

### CONTENTS

- § 1 - 学芸員課程カリキュラム  
卒業生の主な就職先  
令和元年度 博物館実習依頼館園
- § 2 - 巻頭言「学生を引率して」  
成城大学文芸学部教授 外池昇
- § 3 - 学芸員名鑑 第4回  
「なぜ学芸員になれたのか」 鈴木通大
- § 4 - 名作異聞 第1回  
「『美術品移動史をよむ』」 吉井大門
- § 5 - 令和2年度学芸員課程開講科目および担当教員
- § 6 - 編集後記

## 成城大学学芸員課程ニュースレター



vol. 04



**学** 生を博物館等に引率する機会が度々ある。ことに現在文芸学部文化史学科の「文化史実習Ⅰ」を担当しており、夏場になると学外実習と称して何ヶ所かの博物館等に伺ってお話を伺う。それをもう十年位も続けているであろうか。その度に学芸員の方のお世話になる。熱心に学生に対応して下さる。良いお話をして下さる。心からの感謝を申し上げる。

**お** 忙しい中とはもちろん重々承知している。さぞ迷惑をかけていることであろうと思う。そして、このような学生の団体への対応は、学芸員の方の日々の勤務の中でいったいどのような位置を占めているのだろうかとも思うのである。とは言いながら、学生にとっては得難い機会である。学生自身にもその自覚は大いにある。学生は、確かにきちんと展示物を自分の眼で見、学芸員の方の話を自分の耳でよく聞いている。

**後** 期の授業が始まってから、レポートを書いて提出して貰っている。それを毎年欠かさず読んでいる。経験から言うと、学生にとって乗り越えるべき事柄は、個々の展示物等に関する知識の欠如等もさることながら、むしろ文章の表現力の問題が重要と思われる。自分の眼で見たものに、自分の耳で聞いたことをどのように順序立てて言葉で表現するかということが確りと分かっていなくては、決して良いレポートが書ける訳はない。学生がレポート作成に向き合うということは、見学した展示物についての考え方を自ら構築しようとする取り組みであると同時に、学芸員の方のお話をどのように咀嚼しようとするのかという問題に立ちむかうことに他ならないのである。それを乗り越えてこそ、学生にとってレポートを書いた意味があるというものである。

**そ** して、学生には学芸員志望者が多い。学芸員は羨望の職業なのである。その学芸員から直接お

## 学生を引率して

成城大学文芸学部教授 外池 昇

話を伺うのは学生にとっては貴重な機会であり、これを数多く経験しながら、学生は自身の能力を自ら高めてゆくのである。どうぞ、学芸員ならではのよいお話をこれからも学生にお聞かせ頂きたいと思う。

#### ・学芸員資格取得要件（文芸学部生のみ対象）

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席したうえで、①と②を満たす必要があります。

- ①「必修科目」19単位、「選択科目」を2系列以上にわたって8単位以上修得
- ②学部を卒業（学士の学位を取得）する

大学院生の場合は、①を満たした時点で資格が取得できます。

なお、「必修科目」のうち、博物館実習については、学内での講義のほか、博物館や美術館等で実習を行う必要があります。

※詳細は文芸学部履修の手引を参照してください。

#### ・学芸員資格取得までの流れ

##### ・1年次

- ① 学芸員課程登録説明会（3月）
- ② 博物館学芸員課程費（5,000円）納入

##### ・2年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録（3年次に「博物館実習」を履修するためには、学芸員課程必修科目のうち「博物館概論」および「博物館教育論」を含む8単位の修得が必要）
- ② 博物館実習先開拓ガイダンス（10月～11月）
- ③ 博物館実習先の開拓
- ④ 博物館実習 次年度履修許可者発表（3月）

##### ・3年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録
- ② 博物館実習マナー講座、博物館実習直前ガイダンス（5月）
- ③ 博物館実習費（10,000円）納入
- ④ 各館園での博物館実習（5月～12月）

##### ・4年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録
- ② 学芸員資格取得者発表（3月）
- ③ 学芸員資格証明書交付（学位記授与式の日に教務部にて配付）

#### そ の 他

学芸員資格取得の最大の関門となるのが博物館実習です。博物館実習先については、各学生の希望に基づき、学内選考や各館園での選考の後、決定されます。事前に様々な館園を訪問し、特色や展示方法等を学ぶとともに、履歴書の書き方や自己PR、志望動機など事前に準備をしておきましょう。

#### 卒業生の主な就職先

（博物館・美術館等文化財関係施設）

北海道立帯広美術館 北海道立近代美術館 北海道立函館美術館 青森県立郷土館 棟方志功記念館 八戸市美術館 宮城県美術館 木の博物館吉成銘木店 郡山市立美術館 みちのく民俗文化研究所 茨城県近代美術館 小杉放菴記念日光美術館 栃木県立博物館 群馬県立自然史博物館 群馬県立館林美術館 群馬県立歴史博物館 高崎市美術館 朝霞市博物館 うらわ美術館 川口市教育委員会 川越市立博物館 埼玉県立近代美術館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 宮代町郷土資料館 我孫子市教育委員会 国立歴史民俗博物館 千葉県教育委員会 千葉県立中央博物館 千葉県立美術館 千葉県立房総のむら 船橋市教育委員会 八千代市立郷土博物館 出光美術館 太田記念美術館 大倉集古館 小川美術館 国文学研究資料館 国立西洋美術館 汐留ミュージアム 渋谷区立松涛美術館 静嘉堂文庫美術館 世田谷区立次大夫堀公園民家園 世田谷区立郷土資料館 泉屋博古館分館 タイムドーム明石（中央区立郷土天文館） 大東急記念文庫 たばこと塩の博物館 東京国立近代美術館 東京国立博物館 東京ステーションギャラリー 東京都江戸東京博物館 東京都写真美術館 東京都庭園美術館 東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 中富記念くすり博物館 日本書道美術館 ニューオータニ美術館 根津美術館 練馬区立美術館 八王子市郷土資料館 府中市立美術館 プリヂストン美術館 文化庁 松岡美術館 三井記念美術館 目黒区美術館 山種美術館 厚木市郷土資料館 神奈川県立歴史博物館 鎌倉国宝館 鎌倉市鎌木清方記念美術館 川崎市市民ミュージアム 川崎市立日本民家園 そごう美術館 松前記念館 玉川文化財研究所 横浜美術館 青春白樺美術館 山梨県立博物館 池田満寿夫美術館 諏訪市美術館 長野県信濃美術館 長野市立博物館 岐阜県現代陶芸美術館 岐阜県美術館 上原美術館 MOA美術館 静岡県立美術館 愛知県美術館 豊田市美術館 佐川美術館 アサヒビール大山崎山荘美術館 泉屋博古館 京都国立近代美術館 大阪市立東洋陶磁美術館 大阪市立美術館 能楽資料館 倉敷市教育委員会 荻野美術館 海の見える杜美術館 広島市現代美術館 ふくやま美術館 愛媛県美術館 高島華宵大正ロマン館 香川県立ミュージアム 出光美術館門司 熊本市現代美術館 熊本市立熊本博物館 大分県立歴史博物館 沖縄県教育委員会 那覇市歴史博物館

#### 令和元年度 博物館実習依頼館園

今治市村上水軍博物館 入間市博物館 いわき市立美術館 上野の森美術館 賀川豊彦記念 松沢資料館 神奈川県立近代美術館 葉山館 川崎市立日本民家園 埼玉県立歴史と民俗の博物館 さいたま市立博物館 市立市川歴史博物館 シルク博物館 石洞美術館 世田谷区立郷土資料館 世田谷美術館 世田谷文学館 致道博物館 千葉県立美術館 東京国立博物館 東京都江戸東京博物館 東京都写真美術館 東京富士美術館 東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館 日本民藝館 府中市美術館 北海道開拓の村 民音音楽博物館 野球殿堂博物館



# 学芸員 名鑑 第4回

## 『なぜ学芸員になれたのか』

鈴木 通大

成城大学非常勤講師・元神奈川県立歴史博物館 学芸員

ぼくは、なぜ学芸員になれたのか、というエピソードを紹介したいと思います。成城大学

には、一九六七年に入学し、大学院を通して一九七八年まで在籍し、その間に就職への選択肢として教職課程および博物館課程を履修して教員と学芸員の資格を取得しました。大学では、「日本民俗学」を専攻し、この間に多くの先生から講義を受けるとともに、学友仲間とはフィールドワークや研究会などへ参加する日々でした。その当時は、日本各地の農村・漁村・山村を訪れる機会に恵まれていたので、当地の博物館・資料館施設にかならず立ち寄り、数多の美術資料・歴史資料・民俗資料（民具）などのホンモノ（実物資料）に鑑賞しました。その体験は、学芸員になってから、仕事上、大い

に役立つ財産のひとつとなりました。

奇遇にも、一九七八年一〇月一日に中途採用で神奈川県立博物館（現・神奈川県立歴史博物館）に、民俗担当の学芸員として就職が決まりました。偶然ながら、一年前に当博物館でアルバイトしていたことで、翌年の九月に採用試験を受ける機会を得ました。なんと、合否の結果は突然、勤務する三、四日前に一本の電話によって採用を知らされました。入館した頃の学芸部に所属していた学芸員は、情報・普及系、自然系、人文系に総勢三〇名が在籍三名でした。しかも、専門のカメラマンが二名おり、資料写真や祭礼などの撮影に当たっていました。

学芸員の仕事は、資料の収集、整理、展示、調査研究などに従事し、遂行することが大切な業務です。学芸員課程では、受講者に「博物館についての知識理解を深め、専門職員であるべき学芸員として出発できる基本的な素養を身につける」ことを目標としています。現実には博物館へ入ってから二、三年の経験を積まないと一人前になれません。その間、諸先輩からあらゆる場面で適切な指導を受けながら、仕事を覚えて学芸員としての資質を高めていきます。とくに、基本的な巻物・掛軸などの取扱い、資料の梱包・開梱などは作業現場で経験を重ねながら身に付けていきます。

当然ながら、収蔵庫に籠もって民俗資料の整理に当た



「収蔵庫見学の様子」

り、同時に資料と資料名を確認しつつ、その収蔵場所を確認しおきます。資料の閲覧請求があった際に、直ちに提供できるような態勢を整えておくのです。また、資料に関する材質・用途・由来などの属性データを完備しておくのです。さらに、専門である民俗学についても最新の研究成果を把握しておかなければなりません。これらの情報収集には、学生以来の仲間・友人、他館の学芸員などの人

的ネットワークに恩恵を蒙っています。今、振り返って見ますと、民俗学という専門性を活かせる学芸員になれたことは幸運だったと思います。

もし、学芸員を志向するならば、「なぜ、学芸員になりたいのか」、「学芸員になったらどんな仕事をしたのか」、という自分への課題を持って、目標に向かってくださいと…。



「神奈川県立歴史博物館外観」



「展示解説の様子」



# 第1回 名作異聞

日本には数多くの文化施設があります。旅行先でおとずれ感銘をうけた美術館・博物館・郷土資料館・文学館など、知られざる魅力的な「極私的オススメ」ミュージアムや、この一枚など思い入れのある作品をとりあげます。ほかにも、OB・OGの刊行物や専門分野などの紹介をしていきます。学生からのオススメ情報もまっています。初回は成城大学文芸学部芸術学科教授であった、田中日佐夫先生の著作を紹介いたします。

## 『美術品移動史』

（日本経済新聞社刊）という本をご存知だろうか。本書は雑誌『芸術新潮』に昭和四十八年一月から六十回にわたり連載された「戦後美術品移動史」に加筆し書籍化したもの。昭和五十六年（一九八一）の発行で著者は本学、芸術学科教授であった故田中日佐夫先生によるものだ。

もう二十年も前の学部の一年だった稿者は、当時退官される最後の年だったと記憶するが、田中先生の授業を受けて感銘を受けたかという点、正直授業の内容は覚えていない。だけれども、一号館二階の突き当たりの教室で費やした時間は、無駄にはならなかったようである。毎回、授業で取り上げた作品をレポート用紙に描いて（当時は描かされて）、それにコ

らの蒐集品の移動先は、一軒の古美術商であり、一つの企業体のつくる財団法人であった。今となつては復元することも難しくなったコレクシヨンの散逸をおしみつつ、さらに続けて著者はいう。「なぜ、そのとき、国は、地方公共団体は、なんとかチャンスを見逃さずに手をさしのべられなかったのだろうか（コレクシヨンが散逸するのを）。税金を課することはそれはそれでよい。しかし、その反面の工作（散逸しないための）が公的機関によってなされるような体制がつくれなかったものだろうか。」と何やら耳に痛い。

そして、加えて「戦後の何年か、わが国はまさに文化国家による再建を叫んでいた。そういう時代に、そういうことができなかったことは、やはり欺瞞の時代だったのだと思う。」といったように、今だからこそ美術館・博物館は、多様な文化遺産をコレクシヨンとして蓄積し展示・普及活動をおこなって、未来へ継承していく役割をあらためて考えるべきではないだろうか。といわんばかり。

はからずも「文化庁アートブラットフォーム事業」や、一昨年

## 『美術品移動史』をよむ

横浜市歴史博物館学芸員

吉井大門

メントをして提出するという課題は、一つの作品をじっくりみるという美術史の基本を学び、ふとしたときに思いおこさせてくれる。

話を元に戻すと、本書は冒頭「美術品もまた人の手から人の手へ渡り伝えられていく」という一文からはじまる。続く本編は、三十数名におよぶ戦前・戦後の美術コレクターを取り上げ蒐集作品にまつわるエピソード。コレクターと作品との間に存在し仲介者としての役目を果たした人たちのことを折にふれ、美術品の蒐集家コレク

議論を巻き起こした「リーディングミュージアム」構想などアート市場の活性化を、そのまま経済効果に置き換えようとする国策が、きたる未来で著者のいう「欺瞞の時代」だったなんていわれることのないように。とドキリとする。

このほか、内容盛りだくさん。根津嘉一郎、大倉喜八郎といえど一度くらい名前が耳にしたことがあるだろう。もう少し加えると、五島慶太、畠山一清、出光佐三。関西方面では、小林逸翁、山口吉郎兵衛、黒川幸七、嘉納治兵衛、細見亮一。この辺、誰それって感じにならないでね。日本の経済成長に一役買った偉大な実業家たちなのです。加えて石橋正二郎、山崎種二といった近代美術のコレクター、さらに現代美術のコレクターも視野に入れる周到ぶり。今でも私立美術館として運営されるコレクシヨンの母体を形成した、実業家コレクターたちがつぶさに紹介される。

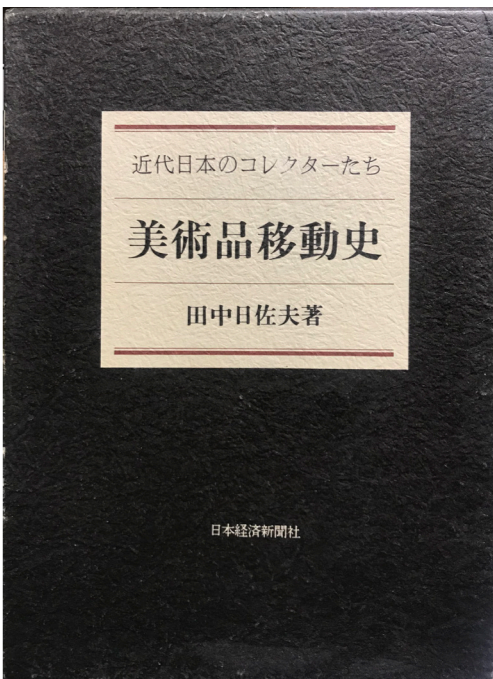
彼らによって集められたコレクシヨンは、散逸の危機に遭いながらも元の形を残して、現在まで伝えられるなか、本編は続いて次世代のコレクターたちの姿を追って

ターの人となり、コレクシヨンの形成過程、そして所有者亡き後のコレクシヨンのその後などを丹念に辿りながら蒐集家の姿を浮き彫りにしてくれる内容だ。

この種の本はたいがい（個人的な主観）著者の思い出話と作品との出会いに終始するのだが。あなごるなかれ、益田鈍翁旧蔵の《絵因果経》、《源氏物語絵巻》、《佐竹本三十六歌仙》、《地獄草子》、原三溪旧蔵《孔雀明王像》、雪舟筆《四季山水図》といった画像を見れば、あゝこれこれって、となる教

いくのだ。こうしたコレクターの様相から著者がいわんとすることは、美術史学は「現代史」であるということ。作品が生まれ、所有者が変わりながらも現代にいたる歴史をあゆみ、私たちがここで、美術作品と出会い語るからこそあくまで「現代史」であるという。そして美術作品は、未来へ継承されていくといったところだろうか。

本書は、「美術史は美術品移動によって始まる」としてしめくくる。美術作品に包含された歴史（文化・社会・政治・制度）や媒介した人たちを知ること、そこから受ける感動は多様にして豊かになるものであるとして、一方では、美術品を購入・売却することは税金問題や財産分与、遺産相続というセンシティブな問題とも密接に関わっていることを指摘する。そうはいいいながらも、芸術の価値を値段で測ろうとするものではないと真っ向に否定しつつ美術作品ひいては美術史において、経済的側面と切っても切り離せない関係性を浮き彫りにしようと試みているのである。



田中日佐夫著『美術品移動史：近代日本のコレクターたち』日本経済新聞社 1981年11月発行

約四十年前に出版された書籍とはいふけれど、今読んでもあたらしく、美術史に対する未来へのあり方と愛が伝わってくるのである。

科書でもお馴染み、今では国宝・重文となり美術館・博物館に収蔵される、有名美術作品の劇的変遷を、回想録・文献資料・聞書や伝聞を交え綴られる語り口は、惹き込まれるように読ませるアーカイブでもあるのだ。

詳細は本を手にとってもらつて。内容の一部をあげると、たとえば、益田鈍翁、原三溪という戦前の二代コレクターの姿とコレクシヨンの形成から崩壊過程を述べたうえで、こう語る。「戦後の財閥解体や事業の経営不振により彼

【必修・選択必修科目】

博物館施行規則に基づく科目		本学開講の授業科目（令和2年度）						
科目名	単位数	授業科目名	単位数	学年 配当	実施学期	曜限	担当教員	備考
生涯学習概論	2	生涯学習概論	2	2	前期	月3	本庄 陽子	半期終了科目
博物館概論	2	博物館概論	2	2	前期	火2	中野 照男	半期終了科目
博物館経営論	2	博物館経営論	2	2	前期	木3	中野 照男	半期終了科目
			2	2	後期	木3		
博物館資料論	2	博物館資料論	2	2	前期	土2	和田 浩	半期終了科目
			2	2	後期	土2		
博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	2	前期	土1	和田 浩	半期終了科目
			2	2	後期	土1		
博物館展示論	2	博物館展示論	2	2	前期	木3	篠原 聡	半期終了科目
			2	2	後期	木3		
博物館教育論	2	博物館教育論	2	2	後期	月3	寺島 洋子	半期終了科目
博物館情報・メディア論	2	博物館情報・メディア論	2	2	前期	木4	篠原 聡	半期終了科目
			2	2	後期	木4		
博物館実習	3	博物館実習（美術史）	3	3	通年	水3	野地 耕一郎	1科目を必修とする
					通年	水4	野地 耕一郎	
		博物館実習（民俗学）	3	3	通年	木2	小島 孝夫	
					通年	火2	丸尾 依子	
博物館実習（考古学）	3	3	通年	土2	井上 洋一			

【編集後記】

▲第4号では外池昇氏、鈴木通大氏、吉井大門氏にご寄稿いただいた。外池氏は巻頭言のなかで博物館の見学実習を通して学生が向き合うべき事柄の重要性を、鈴木氏は学芸員名鑑のなかでご自身のキャリア形成に言及しつつ学芸員が向き合うべき仕事の重要性を指摘されている。名作異聞では吉井氏が学芸員に求められる資質について重要な指摘をされている。

博物館法の改正に伴い2012年にスタートした大学の学芸員養成のための新カリキュラムも導入後8年が経過した。この間、大学における学芸員養成教育は関連科目や博物館実習の拡充により一定の深まりをみせたが、「博物館氷河期の時代」を生き抜くだけのスキルや技術を身につけるには程遠く、また、多様な社会や文化を尊重するユニバーサル・ミュージアム（誰もが楽しめる博物館）の実践もまだまだである。博物館は、学芸員は、そして大学の学芸員養成教育はどこに向かっているのか。

表紙の写真は、「博物館実習（美術史）」の一環で、OBが勤める企業博物館での特別見学ツアーの様子である。現場の学芸員さん（しかもOB）の「生」の声は、やはり学生の心に響くようである。多忙のなか、こうした見学ツアーを快諾して下さる学芸員は、現場の仕事に情熱を注いでおられる方がほとんどである。後進の育成にも寄与する、という学芸員の使命感のみに頼りすぎてはならない。実習で学生を送り出す大学側も、そして博物館や美術館側も、それぞれが連携し合ってお互いに新たな人づくりの道を模索するべき時期にさしかかっている。博物館が多様な社会、持続可能な社会を実現する、そのための人づくりが求められている（S）。

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 04  
Seijo University Curator Course Newsletter  
発行：成城大学学芸員課程委員会  
157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20  
TEL 03-3482-9045  
mail: gakupei\_nl\_s@seijo.jp  
編集担当 吉井大門 篠原聡  
2020年3月31日発行